

教科書に載せたい名作名文ハイライト

# 桜桃

太宰治

朗読 佐藤節子  
出所 声の花束

<http://www.koetaba.net/3book/index.html>

teabreak 編

# 桜桃 太宰治

われ、山にむかいて、目を挙ぐ。——詩篇、第二百二十一。

## ●冒頭部分

子供より親が大事、と思いたい。子供のために、などと古風な道学者みたいな事を殊勝らしく考えてみても、何、子供よりも、その親のほうが弱いのだ。少くとも、私の家庭においては、そうである。まさか、自分が老人になってから、子供に助けられ、世話になろうなどという図々しい虫のよい下心は、まったく持ち合わせてはいないけれども、この親は、その家庭において、常に子供たちのご機嫌ばかり伺っている。子供、といっても、私のところの子供たちは、皆まだひどく幼い。長女は七歳、長男は四歳、次女は一歳である。それでも、既にそれぞれ、両親を圧倒し掛けている。父と母は、さながら子供たちの下男下女の趣きを呈しているのである。

夏、家族全部三畳間に集まり、大にぎやか、大混乱の夕食をしたため、父はタオルでやたらに顔の汗を拭き、めし食って大汗かくもげびた事、と柳多留にあったけれども、どうも、こんなに

子供たちがうるさくては、いかにお上品なお父さんといえども、汗が流れる」

と、ひとりぶつぶつ不平を言い出す。

母は、一歳の次女におっぱいを含ませながら、そうして、お父さんと長女と長男のお給仕をするやら、子供たちのこぼしたものを拭くやら、拾うやら、鼻をかんでやるやら、八面六臂のすさまじい働きをして、

お父さんは、お鼻に一ばん汗をおかきになるようね。いつも、せわしくお鼻を拭いていらっしやる」

父は苦笑して、

それじゃ、お前はどこだ。内股かね？」

お上品なお父さんですこと」

いや、何もお前、医学的な話じゃないか。上品も下品も無い」  
私はね」

と母は少しまじめな顔になり、

「この、お乳とお乳のあいだに、……涙の谷、……」  
涙の谷。

父は黙して、食事をつづけた。

●最後の部分

涙の谷」

そう言われて、夫は、ひがんだ。しかし、言い争いは好まない。沈黙した。お前はおれに、いくぶんあてつける気持で、そう言ったのだろうが、しかし、泣いているのはお前だけでない。おれだって、お前に負けず、子供の事は考えている。自分の家庭は大事だと思っている。子供が夜中に、へんな咳一つしても、きっと眼がさめて、たまらない気持になる。もう少し、ましな家に引越して、お前や子供たちをよろこばせてあげたくてならぬが、しかし、おれには、どうしてもそこまで手が廻らないのだ。これでもう、精一ぱいなのだ。おれだって、凶暴な魔物ではない。妻子を見殺しにして平然、というような「度胸」を持ってはいないのだ。配給や登録の事だって、知らないのではない、知るひまが無いのだ。……父は、そう心の中で呟き、しかし、それを言い出す自信も無く、また、言い出して母から何か切りかえされたら、ぐうの音も出ないような気もして、

誰か、ひとを雇いなさい」

と、ひとりごとみたいに、わずかに主張してみた次第なのだ。母も、いったい、無口なほうである。しかし、言うことに、い

つも、つめたい自信を持っていた。この母に限らず、どこの女も、たいていそんなものであるが)

でも、なかなか、来てくれるひともありませんから」

捜せば、きっと見つかりますよ。来てくれるひとが無いんじゃない、いてくれるひとが無いんじゃないかな？」

私が、ひとを使うのが下手だとおっしゃるのですか？」

そんな、……」

父はまた黙した。じつは、そう思っていたのだ。しかし、黙した。

ああ、誰かひとり、雇ってくれたらいい。母が末の子を背負って、用足しに外に出かけると、父はあとの二人の子の世話を見なければならぬ。そうして、来客が毎日、きまって十人くらいずつある。

仕事部屋のほうへ、出かけたいんだけど」

「これからですか？」

そう。どうしても、今夜のうちに書き上げなければならぬ仕事があるんだ」

それは、嘘でなかった。しかし、家の中の憂鬱から、のがれた  
い気もあったのである。

今夜は、私、妹のところへ行って来たいと思っているのですけど」

それも、私は知っていた。妹は重態なのだ。しかし、女房が見舞いに行けば、私は子供のお守りをしていなければならぬ。

だから、ひとを雇って、……」

言いかけて、私は、よしだ。女房の身内のひとの事に少しでも、ふれると、ひどく二人の気持がややこしくなる。

生きるという事は、たいへんな事だ。あちこちから鎖がからまっついていて、少しでも動くと、血が噴き出す。

私は黙って立って、六畳間の机の引出しから稿料のはいつている封筒を取り出し、袂につっ込んで、それから原稿用紙と辞典を黒い風呂敷に包み、物体でないみたいに、ふわりと外に出る。

もう、仕事どころではない。自殺の事ばかり考えている。そうして、酒を飲む場所へまっすぐに行く。

「いらっしゃい」

飲もう。きょうはまた、ばかに綺麗な縞を、……」

わるくないでしょう？ あなたの好く縞だと思っていたの」

きょうは、夫婦喧嘩でね、陰にこもってやりきれねえんだ。飲

もう。今夜は泊るぜ。だんぜん泊る」

子供より親が大事、と思いたい。子供よりも、その親のほうが弱いのだ。

桜桃が出た。

私の家では、子供たちに、ぜいたくなものを食べさせない。子供たちは、桜桃など、見た事も無いかもしれない。食べさせたら、よろこぶだろう。父が持って帰ったら、よろこぶだろう。蔓を糸でつないで、首にかけると、桜桃は、珊瑚の首飾りのように見えるだろう。

しかし、父は、大皿に盛られた桜桃を、極めてまずそうに食べては種を吐き、食べては種を吐き、食べては種を吐き、そうして心の中で虚勢みたいに呟く言葉は、子供よりも親が大事。